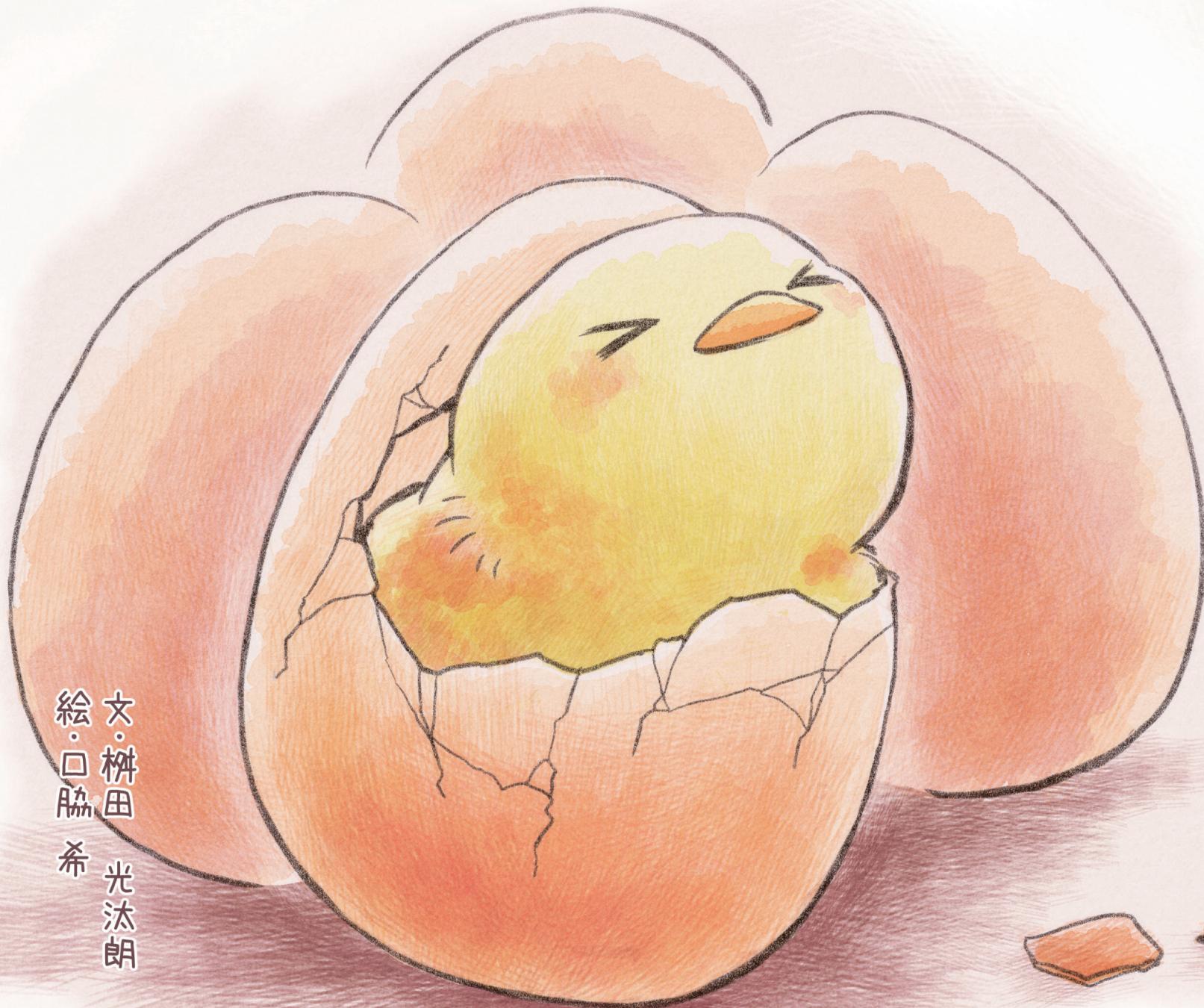


ひよーの 赤ちゃん



文・絵
大・樹田
口脇
光太郎
希

気が付いた時にはぼくは存在していた。

目は開かない、声を出すこともできない、

ぼくがどこにいるのかもわからない。

でもわかることが一つある。それは今、

ぼくは誰かによつて温められているということだ。

誰が温めているのかはまだ分からない。

でも、温めていてくれる人は大切な誰か、そんな気がする。

少し時間がたつたころ小さくではあるが声が聞こえた。

「私のかわいい、かわいい子どもたち、元気に生まれてきてね」

ぼくの親だろうか？

ぼく以外にも声をかけているようだつた。

多分、ぼくには兄弟がいるのだろう。

それから少し時間がたつと手が動かせるようになった。

でも、手を動かしてみると何かに当たつてとても痛い。

それをさわってみると、ぼくが丸い形の物に入つているということが分かつた。

これが何なのかぼくは知らない。目を開けてみてみたいけどまだ目を開くことはできない。

その日は最初に聞いた声ともう一つの声が聞こえた。

「あなた、えさありがとう。とても元気が出るわ」

「気にするな、僕と君の子どもたちだ。君が育てて僕がエサをとつてきて君を支える。

当然のことをしているだけだよ！」

「ふふ、けがしているの、私分かっているからね。この子たちのために
私を残してくれているのはうれしいけど、あまりむちやはしないでね？」
大好き

「僕もだよ」

多分、新しく聞こえた声はパパだろう。そしてぼくが生まれた時に聞こえた声はママの声。

この二人が僕を生んでくれた大切な親。

どんな顔なのか早く見てみたい。それにぼく以外の兄弟にも会つてみたい。

それからまたしばらくたつたころついに足を動かせるようになつた。

ぼくは足を動かせたらやってみたいことがあつた。

それは動いて僕が元気であることを親たちに知らせたいのだ。

早速行動に移した。上にジャンプすると頭を打つてすぐに下に落ちる。

「あら、この子は元気ね、ジャンプして頭でもぶつけてないか心配ね」

ママの声が聞こえた。

ぼくはうれしくて横にごろごろと転がる。

外に何かがあつてあまり動くことはできないが、それでもぼくはごろごろと転がる。
「あらあら、この子は本当に元気で。生まれてくれるのが楽しみだわ」

ママは笑いながらぼくのからをなでてくれるのがなぜかわかる。

そこにはママのアイを感じた。

また、長い時間がたつとようやく目を開くことができた。

しかし、ボクの目に映ったのは目を開けられなかつたときと同じ景色だった。

ぼくは手を伸ばしてみるとそこに何かがあるのは分かつた。

でも、これが何なのかは目を開けていてもわからない。

その時ぼくは気づいた。ぼくをおおっているものが

最初にさわつたときよりもやわらかいことに。

そしてあることを決心する。ここから出よう！

まだ声を出せないけどぼくはここから出るためには見えないものに体当たりをする。なかなか壊れそうにない。

頑張って体当たりをしているといつの間にか

「えい、えい」と声を出せるようになつてた。

大きな声はまだ出せないけど、声を出して体当たりをすると力が湧いてくる。

ぼくは体当たりを続けた。

連續ではさすがに無理だったので休みながら、しばらく体当たりをし続けると、「ピギッ」という音が聞こえた。

「あ、あなた、今卵からひびの入る音が聞こえたわ！」

「な、何？」かえるのか？ ぼくたちの子どもが！』

「そうよ！ もう少しかかるかもしないけど

ようやく私たちの子に会えるのよ」

外からはパパとママの声が聞こえる。

その声に励まされてぼくはまた卵という

ぼくをおおっているものに体当たりをしていると

何回も何回も体当たりをしていると

卵にはあれ目が入つていて

そこから白い光が見える。

そこで僕は思った。

もしかして、今ならジャンプすれば

外に出られるんじゃないか？ と。

ぼくは思い切つてジャンプをする。

すると前に飛んだ時は違ひ頭はいたくなかった。

そして、ぼくの目には白い何かが入つてきた。

おどろいてしまつたぼくは目をつむる。

しかし、外の景色を見たかつたため勇気を振り絞つてゆつくりと目を開けた。

そこには白い毛をした鳥が二匹、ぼくを見ていた。

「パパ？」ママ？「

ぼくは二匹がパパとママであることがすぐに分かつた。

「う、うまれた！」

ママが僕を両手で抱きかかえ大きな声を出し、顔をすりすりしてくれる。

ちよつと痛かったがママにふれあえることができてうれしかつた。

ママがすりすりしていると少しずつ、「ピギッ、ピギッ」という音がひびく。

音のする方を見ると白いものに次々とひびが入つていた。

ママはぼくをそこにおろしてこう言つた。

「さあ、あなたの兄弟たちよ。仲良くしましょ！」

すると、次々卵が割れて僕と同じ黄色い毛をしたひよこたちが出てきた。

ママとパパは大きな両手でぼくたちを包み、

「ええ、みんなのママとパパよ」と言つてくれた。

この時ぼくは生まれて初めてのママとパパ、大切な兄弟たちに遭うことができた。これからぼくの人生はこの人たちと一緒に作つていこう。

